

(様式2)		令和元年度 自己評価表				鳥取県立鳥取養護学校	
中長期目標 (学校ビジョン)		児童生徒一人一人の自立と社会参加をめざし、教育的ニーズに応じた教育を行い、その子らしく輝いて、たくましく生きる力を育む。		今年度の 重点目標	1 保護者や地域の期待と願いに応える【自立と社会参加】 2 学習指導・授業改善に努める【授業実践の充実】 3 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】 4 「チームとりよう」を推進する【連携・協働・業務改善】	《キーワード》「つながる」	
年 度 当 初							
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	(3)月 評価 改善策
1 保護者や地域の期待と願 いに応える【自立と社会参 加】	小学部	○保護者や関係機関と連携した指導支援の充実	・OT・PT等からの助言や、保護者からの情報を実践に取り入れようとしているが、情報を整理したり精選したりする機会や方法について共通理解されていない。	・OT・PT等からの助言や、保護者からの情報が適切に記録され、効果的に学校生活に取り入れられている。(共通)	・OT・PT等からの助言や、保護者からの情報の記録方法や実践とのつながりについて、学部内で共通理解を図る。 ・学期末に、取り組みについて振り返り、改善を図る。	・外部機関の助言の記録方法を学部として統一していなかったが、クラス内では助言内容が共有され、指導にいかされていた。	C ・助言内容等について学部全体に周知したいことについては、閲覧やPC上で共通理解が図れるようにする
	中学部	○自己実現に向けた指導・支援を行うための連携の在り方	・自らの進路について考える機会が少なかった生徒もいる。(単一障がい学級) ・キャリア教育部座談会等により保護者へ情報提供している、参加できなかった家庭には十分な情報交換ができていない。	・将来の自分の姿をイメージし、そのためにどんな力が必要かを考えられるよう、吟味された学習内容での指導が行われている。(単一障がい学級) ・進路にかかる情報交換の場を設定し、会に参加できない保護者への情報提供も確実に行うことができる。(共通)	・高等部の教育課程や学びの実態を生徒に知らせたり、本校以外の高校や高校卒業後の福祉就労等の実態を伝えたりする学習の場を設定する。(単一障がい学級) ・学部会などで実施月を決め、進路情報の情報交換したり、保護者と進路について話すことができるよう計画をしたりする。	・生徒の実態に応じ、担任を中心に進路指導することで3年生は自分の問題として捉え、前向きに取り組む姿が見られるようになった。2年生は進路について十分ではないが、意識は高まりつつある。 ・保護者への進路情報提供については、福祉施設・関係機関等利用週間や個別懇談等の機会に、担任を中心に行った。	B ・自分の障がいや病気について理解が深まるよう、生き方について道徳や総合的な学習に結びつけた年計を作成したり、実際に障がいや病気と付き合いながら働いておられる方の話を聞く機会を設ける。 ・保護者への進路情報の提供について、機会や提供内容、提供者など検討し、計画的に実施する。
	高等部	○確かな進路実現に向けての支援体制づくり	・高等部卒業後の進路は、生活介護から一般就労、進学等多様であり、それぞれの進路に応じた丁寧な指導・支援が必要である。	・職場体験や施設利用体験等を生かして、それぞれの進路に応じた指導・支援が計画的に行われている。(共通)	・本人や保護者の進路に関する希望をもとに、具体的な計画やスケジュールを立てて進路担当教員とも連携しながら、進路実現へ向けての指導・支援を進めていく。 ・体験より見えてきた個々の課題の共通理解を図り、指導・支援を行う。	・本人や保護者の進路に関する希望をもとに、今後のスケジュールを具体的に立て、それを元にした指導・支援を進めた。 ・個々の課題について共通理解する機会をもち、日々の学習に生かすように努めた。	B ・進路実現に向けて保護者との連携をしっかりと図っていくため、年間を見通して保護者への情報提供を進めていく。 ・進路の流れについて、職員が集まる機会を利用して計画的に研修の機会を設ける。
	文化部	○全校、全職員で取り組む「とりようわくわくフェスタ」	・「とりようわくわくフェスタ」のねらいや意義が少しずつ浸透してきているが、担当者の負担が大きい。 ・担当者から発信する情報が共有できていないことも多々ある。	・教職員が情報を共有することで、担当者のやるべき仕事に分かり、効率的に運営されたと感じている。(7割以上)	・担当者の役割を明文化し、仕事量を分散するとともに、各学部で連携が取れるようにする。 ・学校の一日にわくフェス欄を開設し、最新情報が担当者に確実に伝わるようにする。	・学校の一日にわくフェス欄を設けたことで、情報が共有しやすくなった。 ・わくフェスの捉えが職員に浸透していないとやや感じられる。	B ・誰にでもわかるシステムの明確化(見やすいフォルダ) ・スローガンを早めに提案する。(9月 → 7月) ・わくフェスの意義を早めに提案し、全職員で共通理解する。
	自立活動部	○児童生徒の実態に応じた、自立活動の適切な目標設定と指導内容の充実	・お役立ち勉強会(自主勉強会)や自立活動情報誌「MANABI」等で、自立活動の指導に関する情報を定期的に提供している。 ・昨年度5回、自立活動の目標設定の手続きについての勉強会を実施した。しかし、目標設定に至る手順の理解や流れ図作成に困難さを感じている。 ・教育課程上の名称が、「からだ」「食事」から「自立活動」に変更された。	・主催した各種研修会の内容が、教職員にとって日々の授業実践に役立つものであったと感じている。(7割以上) ・来年度の目標設定に向けて、全児童生徒の流れ図(根拠が明確にわかるもの)と指導仮説を作成している。	・自立活動の目標設定や指導内容の充実に関する勉強会を年2回以上実施するとともにアンケートをとる。 ・MANABIを年5回以上発行するとともに、とりよう夏季セミナー、自立活動研修会、お役立ち勉強会等を通じて、実践に役立つ研修会を年7回以上実施し、アンケートをとる。	・MANABIは3月までに5回発行する予定である。実践に役立つことを意識した研修会を7回以上実施することができ、職員へのアンケート結果も8割以上が役立ったと感じている。 ・自立活動目標設定シートを作成し、それを活用して目標設定を行うよう提案した。これに伴い、目標検討会のやり方も刷新した。従来の検討会よりもグループ内で活発に意見交換されるようになった。活用にあたり、研修会を開いて共通理解を図ったが、活用初年度ということもあり、難しさを感じる職員もいる。	B ・引き続き、職員のニーズを考えながら、実践に役立つ研修会を実施していく。 ・自立活動チェックリストの活用や自立活動目標設定シートの作成方法や意義について、職員の理解を深められるように研修会を実施していく。
	キャリア教育部	○収集した情報の発信	・昨年度は、東部地区にある16か所の事業所を訪問して事業所の状況を把握し、事業所情報を更新・追加した。 ・事業所情報をまとめたファイルの活用について担任等に説明したり、事業所を訪問して体験先の相談にのる必要性も感じている。	・進路先や体験先の情報を収集し、教職員や保護者に提供することで、卒後の選択肢の幅が広がっている。	・学校の一日で、人権教育とキャリア教育に関する情報が、必要な時に閲覧できるようにするとともに、支援部だよりで新しい事業所等の情報を提供する。 ・職員研修を通して、児童生徒の社会参加について話し合う機会を設定する。	・生徒が社会参加するために必要なことを教職員に対して資料を提供し、共通理解して授業や指導に活かせるようにした。資料の活用についてはまだ不十分である。 ・事業所情報を学校の一日や支援部だよりで新規事業所の情報提供をした。必要に応じて本人・保護者と見学を設定し体験学習先を決めることにつなげた。	B ・各学部で知りたい内容が違うので、目的に合った計画を立てて研修をする。
2 学習指導・授業改善に努める 【授業実践の充実】	小学部	○自分らしさを発揮し、意欲的に学ぶ授業づくり	・児童の実態に応じた授業づくりに取り組み、授業について複数の教職員で情報交換することができるようになってきたが、教材や指導方法を共有するまでには至っていない。	・教材や指導方法に関する情報交換が日常的に行われている。(共通) ・児童の実態や興味関心に応じた工夫をすることで、授業に対する児童の期待感や意欲が高まっている。(共通)	・授業づくりに関するテーマを決めて、勉強会を月1回程度実施する。 ・職員室の掲示板を使って、授業の様子や指導方法や教材に関する情報を共有する。	・勉強会を通して、授業づくりや教材等に関する情報交換ができた。 ・各クラスで児童の実態に応じた教材や題材を工夫し、興味関心が高まっている様子が見られた。	B ・勉強会や掲示板を通して、授業づくりに関する情報共有を継続する。 ・勉強会等の資料をいつでも見られるように保存する。
	中学部	○一人一人の課題や教育的ニーズに応じた授業づくり	・柔軟的な単元構成、題材設定など教育的ニーズに応じた実践しており、生徒も意欲的に授業に取り組んでいる。しかし、学年が上がるにつれ日々の授業の理解が難しくなってきた生徒がいたり、諸検査等の結果が支援に有効に生かされていなかったりする。(単一障がい学級) ・授業改善のための話し合いが行われるようになってきているが、授業づくりにかかる教材研究が個々に任せられており、事前に検討するための時間が十分に持てていない。(重複障がい学級)	・実態把握をもとにした根拠ある支援を行うことで、生徒の自己肯定感が向上し、学んだことを生活の場面で活用している。(単一障がい学級) ・個々の生徒の願いをくみ取り、教育的ニーズに反映させた明確な目標設定をすることで、生徒にとってわかりやすい授業が行われている。(重複障がい学級)	・学習定着の難しい生徒への具体的な支援の工夫や家庭学習の工夫を継続していく。(単一障がい学級) ・諸検査の結果や引継ぎ資料等を丁寧に読んだり、具体的な支援について話し合う機会を設定したりする。(単一障がい学級) ・個々の教育的ニーズを明確にし、生徒が授業の目標を達成できるよう支援する。 ・単元の始めと終わりに学習グループで目標や支援について確認の会を設定する。(重複障がい学級)	・単一會、重複会、グループ研究の場を活用して実態把握に努めるとともに、教育的ニーズや支援について共通理解を深めることで、生徒が見通しをもち、主体的に取り組める授業づくりに活かすことができた。	B ・年間を通して、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくりができるよう、引き続き共通理解する場を設ける。
	高等部	○様々な人との関わりの中で表出・表現力と課題解決力を高める授業づくり	・各教科担任が生徒一人ひとりの自立と社会参加を目指して授業実践を行っているが、個々の課題やつきたい力について共通理解した上での指導は十分ではない。(単一障がい学級) ・グループごとで出てきた困り感や課題等をテーマとして話し合う機会を設け、それが実践に生かせつつある。(重複障がい学級)	・個々の課題やつきたい力について共有し各教科の授業に取り入れることで、生徒に必要な力がついてきている。(単一障がい学級) ・生徒の実態や単元ごとに授業の話し合いをすることで、生徒の表出が豊かになっている。(重複障がい学級)	・生徒の課題やつきたい力について共有したり、授業の取り組みや生徒の様子について共有するための会を定期的に持つ。(単一障がい学級) ・生活ふれあいの会や子どもを語る会などを利用して、生徒や授業について話し合える場を設ける。(重複障がい学級)	・生徒についての情報提供だけではなく、対応についても話し合う機会が増えた。しかし、ケースによっては、課題解決が難しく、「つきたい力」の定着が十分とはいえない場合もあった。(単一障がい学級) ・定期的または必要に応じて話し合いの機会をもち、それを授業に生かすことができた。しかしより深く話し合うための時間は十分にはもてなかった。(重複障がい学級)	B ・今できている話し合いを引き続き丁寧に続けていく。また、指導目標についての進捗状況を報告し合うなど、自立活動を意識した内容の話し合いを組み入れていく。(単一障がい学級) ・今できている話し合いを引き続き丁寧に続けていく。また、ポイントをしっかりと話し合いやニーズに応じた会の持ち方などの工夫をしていく。(重複障がい学級)
	教務部	○「とりようの『まなび』」の視点に沿った実態把握表の整備	・様々な検査の実施、チェックリストの使用、関連図の作成などを行っているが、子どもの実態の全体像がわかりにくいため学習計画にうまく活用できていない。 ・「とりようの『まなび』」「こころ」「からだ」「せいかつ」の視点に沿った児童生徒の実態のまとめ方が教員によってさまざまである	・「とりようの『まなび』」の3つの視点に沿った実態把握表を作成している。(7割は視点に沿ってまとめることができる。) 【修正】 ・実態把握や目標設定するうえでの課題と、とりようのまなびの視点に沿った諸計画の在り方について整理する。	・自立活動部や研究研修部などとも連携し、各児童生徒の実態把握から目標や学習内容の設定までが明確になるような書式の在り方及び記入内容等について検討する。 ・「とりようの『まなび』」に沿った実態把握について、意見交換や説明したりする場を設定し、教員の理解を深める。	・自立活動部と情報交換し、自立活動部主催で個別の指導計画の目標設定までの流れを確認・整理した。研究の中で年間指導計画の見直しが進んだが、諸計画とのつながりなどについて整理が進まなかった。 ・学習指導要領に基づいた評価・改善をカリキュラムマネジメントにつなげていくことや諸計画作成の在り方についての研修会を後日行う予定。	C ・学習指導要領の内容や、本校の「目指す児童生徒の姿」に沿った計画にしていぐために、諸計画を作成する意義や有用なものにするために必要な内容などを、関係分掌と話し合い、まとめる。 ・研究日や子どもを語る会、学部会などの時間も利用しながら意見交換や理解推進を行う。

	研究研修部	○主体的な学びを育む授業づくり	・「とりようの『まなび』」の視点による教育的ニーズの把握と目標設定は行われているが、学習内容の系統性に曖昧な部分が見られる。 ・新学習指導要領を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が必要になっている。	・「主体的な学び」について共通理解が図られ、一人一授業の実践に取り入れようとしている。(7割以上) ・「合わせた指導」において、教科の視点による学習内容の検討と年間指導計画の見直しが行われている。	・児童生徒の「主体的な学び」を育むために、学習指導要領を読む機会を設け、本校の児童生徒の実態と照らし合わせながら、具体的な取り組みをグループ研究等で検討する。 ・重複の研究グループを学部別に設定し、教科の視点による学習内容及び年間指導計画の検討を行う。	・各研究グループの児童生徒の実態に合わせた「主体的な学び」について共通理解が図られ、一人または一グループ授業実践(約93%の達成値)が行われた。 ・重複の学部別研究グループにおいて、学習指導要領にそって教科の視点による学習内容の見直しが図られ、合わせた指導の年間指導計画を一部修正している。	B	・「とりようの『まなび』」や本校の授業づくりについて共通理解を深め、実態把握に基づく授業づくりを展開できるよう取り組みを継続する。また、教科の特性や学習評価について学ぶ機会を設け、充実を図る。 ・次年度も重複での学部別研究グループの活動を通して、合わせた指導の年間指導計画や学習内容の修正を継続する。
	情報教育部	○ICTを活用した授業実践の推進と充実	・情報モラルの指導ではセキュリティ面での指導に課題があることが明確となった。 ・学習保障事業(オリヒメ)に県、関係団体と連携しながら取り組んでいるが、活用の広がりに課題がある。	・教員が情報モラルについて理解し、情報セキュリティの指導ができる。 ・オリヒメを適切に活用できる教員が、各学部3人以上になる。	・教職員が児童生徒の実態に応じたICT活用が行えるように、関係機関等と連携した研修会を行う。 ・学習保障事業(オリヒメ)を広報し利用を推進する。	・研修等を行い情報セキュリティに対しての意識は高まっているが、他の人に指導できるほどではない。学習保障事業(オリヒメ)については学部別に研修を行い、各学部3人以上は使用できる状態になっている。	B	・ICT活用のさらなる推進のため、情報教育部員を増員する

A:十分達成〔100%〕 B:概ね達成〔80%程度〕 C:変化の兆し〔60%程度〕 D:まだ不十分〔40%程度〕 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕

年		度		当		初		(3)月	
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	到達状況	評価	改善策	
3 児童生徒の健康と安全を守る【QOLの向上】	小学部	○体調に配慮した教室環境づくり	・児童の実態に応じた教室の衛生管理や空調調整に取り組んでいる。 ・児童の障がい特性や体調を踏まえて環境を見直す必要がある。(例 体温低下の時の配慮事項 外気と室温の気温差が大きい時の配慮事項など)	・児童一人一人の障がい特性や体調を踏まえた教室の衛生管理や空調調整がなされている。(共通)	・衛生管理や教室環境に関するテーマ(2か月 1テーマ)を掲げて、児童の実態に応じた環境の改善を図る。	・各クラスで衛生管理に留意し、室温の管理など児童一人一人に応じた対応がなされていた。	B	・衛生管理に関する物品の点検や教室環境を整えるうえでのポイントの標準化などに取り組む。	
	中学部	○生徒が安心感の中でより主体的に活動できる教室環境の整備	・生徒のこころや身体の変化について細かな対応について共通理解が不十分な面がある。(単一障がい学級) ・子どもを語る会等で情報交換を行い、共通理解を図ってきたが、引き続き細やかな確認をしていく必要がある。	・生徒個々の体調や心身の変化等への具体的な配慮ポイントについて記録に残し、共通理解することで生徒が安心して主体的に活動している。(共通)	・わかりやすい記録の取り方について、書式等情報交換を行う機会を持つ。 ・教室環境については写真で紹介するようにする。	・生徒個々の体調や心身の変化について、子どもを語る会、学部会、単一会、重複会等で情報を共有し、生徒が安心して生活できる教室環境、授業・環境づくりに努めた。生徒の体調の変化のに応じ、緊急対応マニュアルを新しく作成して共通理解を図ることができた。 ・記録を取るなどして実態に応じた対応ができたが、情報交換は不十分であった。	B	・発作の記録の取り方等、思春期の体調の変化に対する対応を情報交換する機会を設ける。	
	高等部	○生徒が安心して学べる教育環境づくり	・生徒の特性や体調についての共通理解を行っているが、その解決に向けての早めの対応や未然防止への取り組みが十分ではない。(単一障がい学級) ・年度や季節の変わり目に体調が崩れがちになったり、成長とともに今までにはなかった体調の変化等がみられたりする生徒も多く、より丁寧な対応が必要である。(重複障がい学級)	・複数の教職員で情報共有し、適切な対応をとることで、生徒が心身ともに安心して学校生活が送れている。(共通)	・自らの健康管理を意識できるよう生活習慣を整えたり、気持ちのコントロールを図ることの大切さやその方法について指導する。(単一障がい学級) ・生徒の心身の状況を日々の健康観察等で把握し、担任間で相談したり、養護教諭に相談したりして心身の健康がより良好に維持できるようにする。(重複障がい学級)	・心身の健康を整えるための指導を、少しずつ積み重ねていくことができた。対応が困難なケースによっては、関係機関やSSW、SC等とも連携をして、よりよい対応について検討を重ねた。(単一障がい学級) ・生徒の様子や体調の変化を日々丁寧に観察し、担任間た養護教諭とも連携し、素早い対応に努めた。(重複障がい学級)	B	・連携を大切にした今の取組を今後も続けていく。	
	保健安全部	○児童生徒が安全で快適に学校生活を送ることができる体制づくり	・救急体制の基本的枠組みについては、中央病院の協力も得て体制が整ってきている。今後は、個々の病状に対応した個別の救急対応マニュアルを必要に応じて作成・見直しを行っていく必要がある。 ・地震、火災時の避難場所に関して課題が残っている。防災委員会および、近隣施設との連携を図っていく必要がある。	・教職員が緊急時について想定・検討をし、緊急救急体制が学級・学部・全校で共通理解されている。 ・病院解体工事等に伴う環境の変化に対応した避難体制が整備されている。	・各種訓練の反省、救急・防災ウィークでの気付きをまとめ発信し、必要に応じて体制の検討、物品の整備をする。 ・連絡通路が未完成な時期の救急体制の確立と、新連絡通路完成に伴う救急体制の整備を、医療的ケア検討委員会や給食委員会と連携して行う。 ・総務部等とも連携し、新通路の下見や搬送にかかる時間を計る等、実際に動いてみた上で救急体制を作成し、防災委員会を開催して新緊急救急体制を決定、確立する。	・各種訓練、救急・防災ウィークが学級、学習グループ、学部等での話し合いや訓練につながり、緊急時に備えることができた。その反省や気づきをまとめて発信し、教職員に共通理解を図った。防災ヘルメットを用意し安全な避難への準備を行っている。 ・環境の変化や子どもの実態の変化に合わせて個別の緊急マニュアルを作成、小グループでの訓練を実施することができた。医療的ケア検討委員会や試食会を適宜に開催し、児童生徒の安心安全な環境づくりに努めた。	B	・今後は各学級や学部等での取り組みで見えてきたものを全体のものにして、より一層の情報共有、共通理解を深めていく。重度化している児童生徒がより安全に避難できるルートや場所、必要物品の検討を行っていく。 ・緊急時を想定して今後も定期的な見直しを継続していく。また、病院連絡通路に関わる体制整備は情報が整い次第、各委員会とも連携して具体的な場面や事態を予想した体制づくりや訓練をする。	
4 「チームとりよう」を推進する【連携・協働・業務改善】	支援部	○地域におけるセンター的機能の充実	・外部からの障がいの状態に応じたさまざまな支援や就学に関する相談に対して、校内の職員の専門性を活用し、できるだけチームで対応するようにしている。 ・校外からの教育相談や特別支援教育研修会、交流及び共同学習等、本校のセンター的機能の取り組みについて校内の職員へ周知・理解を進めている。	・エキスパート教員や学部主事等と連携しながら、適切な支援方法の提供や就学相談を行っている。(地域支援) ・本校のセンター的機能について、教職員が周知・理解している。(8割)	・エキスパート教員等を中心として地域へのセンター的機能が果たせるよう、学校としての協力体制を築く。 ・掲示板や職員連絡等で、本校が行っているセンター的機能の取り組みについて報告する機会を設ける。	・就学や進学にかかわる相談では、学部主事や養護教諭、学校看護師等と情報共有をしながら、チームで対応した。 ・特別支援教育研修会の講師や校外からの教育相談については、エキスパート教員や研究主任等の協力を得ながらセンター的機能の充実を目指した。 ・交流及び共同学習や体験入学の受け入れ等、センター的機能の取り組みについては実際の場面での支援や掲示板等での全職員への周知・理解などが進みつつある。	B	・特別支援教育研修会を通して、地域の小中学校等におけるセンター的機能の取り組みが充実するよう、校内の教職員の専門性を活用できるような持ち方や内容について工夫する。	
	キャリア教育部	○本校のキャリア教育の取り組みについて情報発信	・学校説明会、体験入学等で本校のキャリア教育の取り組みを説明する際、提示資料を見直し、説明の内容を整理してきたが、十分に伝わっていない面がある。	・学校説明会、体験入学等で本校の取り組みを説明することで、本校教育を理解する人が増える。	・本校の人権教育やキャリア教育について各学部で共通理解をして実践をする。 ・外部に説明する際の内容を整理し、わかりやすい資料を作成する。 ・東部地区就労促進セミナーで本校教育の取り組みについて発信する。	・人権教育やキャリア教育の取組について説明し、授業づくりや児童生徒へのかかわりについて共通理解して実践した。参観日には、保護者へ向けて人権教育について説明をした。 ・学校説明会、体験入学の説明資料を見直し、卒業後の進路やキャリア教育について説明した。	B	・学校説明会、体験入学、就労促進セミナーなど機会をとらえて本校のキャリア教育について引き続き説明し、理解を促す。	
	総務部	○分掌業務の見直し	・各分掌でそれぞれの役割があるが、本当に必要な業務なのか、どの分掌で担うのが効果的なのかを吟味する機会がない。	・年度末には、分掌業務の削減・再編が示されている。	・分掌反省や教育反省で、分掌業務に対する教職員の意見を集約する。 ・各部の運営計画の書式を統一し、年間の業務が見やすいものにする。	・アンケートの実施、集約を行い、未来企画委員会と連携し将来を見据えながら、業務の見直しを検討している。	B	・再編や、削減された業務について、来年度の教育活動を通して不具合がないか調整を図っていく。	

A:十分達成〔100%〕 B:概ね達成〔80%程度〕 C:変化の兆し〔60%程度〕 D:まだ不十分〔40%程度〕 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕